

岡倉天心(覚三)



(小平市平櫛田中彫刻美術館蔵)

生涯 1863年(文久2年12月26日)～1913年(大正2年9月2日)
 福井藩が横浜に開いた商館の貿易商の家に生まれる。幼名角蔵。
 1869(明治2)年頃 ジェームズ・バラの塾で英語を学ぶ。
 1879(明治12)年 18歳 大岡元子と結婚。この頃茶道を学ぶ。
 1880(明治13)年 19歳 東京大学卒業。文部省音楽取調掛。
 1881(明治14)年 20歳 フェノロサの通訳となる。

海外渡航 1886(明治19)年 25歳

1月 ヨロッパ 諸国の美術視察。(フェノロサ、ピゲローに同行)
 1893(明治26)年 32歳 4～12月 清国美術調査。
 1898(明治31)年 37歳 美術学校怪文書事件
 1901(明治34)年 40歳 11月 インド美術踏査。
 1902(明治35)年 41歳 詩人タゴールと親交を結ぶ。
 1～10月 インド訪問。カルカッタ、アジャンタ古跡巡り。
 1904(明治37)年 43歳
 2月 大観、春草、紫水を連れ渡米。
 3月 ニューヨークで画家アーツ、ボストンでガードナー夫人を知る。
 4月 ボストンで大観・春草展を開く。
 第1回 ボストン美術館勤務。東洋美術品整理。
 1905(明治38)年 44歳
 五浦六角堂を建つ。第2回ボストン美術館勤務。
 1906(明治39)年 45歳
 4月 奈良、京都にて美術品蒐集。
 10月 清国へ。北京、西安で美術品蒐集。
 1907(明治40)年 46歳
 10月 第3回ボストン美術館勤務。中国日本美術部長。
 1910(明治43)年 49歳
 5月 ボストン美術館中国日本部部长。
 10月 第4回ボストン美術館勤務。
 1911(明治44)年 50歳 第5回ボストン美術館勤務。
 1912(明治45・大正元)年 51歳
 8月 インドへ。翌月、カルカッタのタゴール家で
 プリヤダ・デヴィ・バネルジー夫人を知る。
 11月 ヨロッパ経由、第6回ボストン美術館勤務。
 1913(大正2)年 52歳
 2月 オペラ台本“The White Fox”完成。
 3月 病状悪化し帰国。9月赤倉にて死去。
 9月 赤倉にて死去。豊島区駒込染井墓地永眠。
 分骨され五浦にも墓地あり。

《取り上げた作品》

- ・『茶の本』“The Book of Tea”
 (1906年5月 ニューヨーク フォクス・ダ・フィールド社)
- ・「白狐」‘The White Fox’
 “Complete Works of Tenshin”
 1922年9月 日本美術院

《主な作品》

- ・『東洋の理想』“The Ideals of the East”
 1903年2月 ロンドン ジョン・マレー社
- ・『日本の覚醒』“The Awakening of Japan”
 1904年11月 ニューヨーク セチュリ社

《参考文献》

- ・岡倉一雄『父岡倉天心』
 1971(昭和46)年12月 中央公論社
- ・大岡信『岡倉天心』
 1975(昭和50)年10月 朝日新聞社
- ・角山栄『茶の世界史』
 1980(昭和55)年12月 中央公論社
- ・大岡信・大岡玲 訳『宝石の声なる人に一ブリ
 ヤンバダ・デーヴィーと岡倉覚三 愛の手紙』
 1997(平成9)年11月 平凡社
- ・清水恵美子『岡倉天心の比較文化史的研究—
 ボストンでの活動と芸術思想』
 2012(平成24)年2月 思文閣出版
- ・若松英輔『岡倉天心『茶の本』を読む』
 2013(平成25)年12月 岩波書店
- ・中村憲 編『岡倉天心アルバム』
 2000(平成12)年11月 中央公論美術出版
- ・“Okakura Kakuzo collected English writings”
 1984年 Heibonsha Limited Publishers
- ・『岡倉天心全集』全十巻
 1993(平成5)年 平凡社

岡倉天心

——『茶の本』と『白狐』——

日時 2021年5月1日(土) 13時

場所 うつのみや妖精ミュージアム

講師 井村君江(妖精ミュージアム名誉館長)

岡倉天心(1863-1913) 51歳、角蔵——覚三、混沌子。

(I) 謎の人

武士の生糸商の長男弟由三郎、母知らず「女性憧憬」、ジェームス・バラ(英語)、長延寺和尚(漢詩)。

八杉貞との子供(和田三郎、31歳) 妻元子は天心の卒論「国家論」を焼き天心「美術論」を書く。

日本古美術保護、美術局新設、欧米美術取り調べ、フェノロサと中国旅行1886年、東京美術学校。

パトロン九鬼隆一の妻初子をワシントンから日本へ(九鬼周造)、美術学校校長威厳失墜(怪文書)。

五浦の訓練所(日本芸術院)——ボストン、横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山等。

「我々は孔子に倫理を頼り老子に美術を、そして仏陀に宗教を頼る。日常生活は儒教に美的面は道教に頼り、仏教によって死に、埋葬される」(1904頃ボストン美術館公演)。

*『東洋の理想』(The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan、1903年 明治36年)

*『日本の目覚め』(The Awakening of Japan、1904年 明治37年)

*『東洋の目覚め』(The Awakening of the East、1902年 明治35年)

*『茶の本』(The Book of Tea、1906年 明治39年)

*『白狐』(The White Fox、Fairy Drama in Three Acts、1913年 大正元年)

(II) The Book of Tea'(茶の本)

Cha(茶) ——中国広東語のチャ ch'a あと福建語のテー tay (te)

——ロシア語 Chai、チャイ (чай) ;ドイツ語 Tee、英語 Tea.

Teaism——茶道=宗教 ("Teaism is a cult founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of everyday existence.") (日常生活のむさくるしい諸事実の中の美を崇拜することを根拠とする儀式)。

Green tea、Black tea(紅茶) ウーロン茶、ポーヒー(ボヘヤ) 茶。薬、娯楽 Tea house と Coffee house.

(1) 人情の碗 (2) 茶の流派 (3) 道教と禅道 (4) 茶室 (5) 芸術鑑賞 (6) 花 (7) 茶の宗匠たち。

(III) 「白狐」(The White Fox, A Fairy Drama in Three Acts 全三幕の妖精劇)

プリヤムヴァダ・デーヴィ夫人(詩引用) レフラー(作曲未完)、イザベラ・ガードナー夫人献本。

『義経伝説』『安宅』『小敦盛』(1912)、源氏英雄悲劇、平家物語「祇園精舎の鐘の声諸行無常」。

「アリヤ!」「ネンネコヨ」「ナムヤダイヒノカンノンサマヨ」、コルハ、保名、悪衛門

「恋しくば訪ね来てみよ泉なる信太の森の恨み葛葉」(「芦屋道大内鑑」あしやどうおおうちかがみ)。

Fairy (fox maiden) 「乙女狐」、Will-o-the-Wisps(妖精の火、鬼火) fantastic light、fairy day(妖精の日)、

fairy light(妖精の光)、fairy powers(妖精の力)、デーヴィ・パネルジー夫人(jewel voiced madam)の言葉、

「言葉は思想の寡婦でしかない 白と黒の何という冷たい服で装われて!」(詩引用)、(日本人作曲)。

インド、カルカッタで会う。「巨大な劇場にたった一人で坐りみずから一人で演じている絢爛たる演技を見つめる王侯のような気持ちです」(覚三手紙)、ワグナーのオペラを一人見るルーディオヒ2世を思う、ノイエシュヴァンシュ

タイン城の舞台。母に甘える少年。"We are one" "One! To the Spirit of Asia"——oneness。

「十二万年名月の夜 訪ひこん人を松の影」(遺言)。「あなたの胸にコルハは心を残します」(白狐)。